

社会保障制度を勉強することを利用して

私は何がしたかったのか

目次

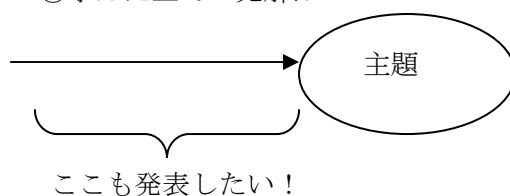
0. はじめに
1. 勉強の動機
2. 勉強の方法
3. 結論
4. 次へ
5. おわりに

0. はじめに～勉強会の定義・流れ

勉強会＝各個人の興味分野の発表

本の要約＋個人の考え

- ①なぜ興味を持ったのか
- ②どういう過程でその興味分野にいたったか
- ③学んだ上での見解は



1. 研究の動機
私の中にある問題提起、悩み
2. 研究の方法
1の回答を得るために選択した方法・内容
3. 結論
1に対する2を踏まえた上での結論
4. 次へ
1に対する回答を得るための次の方法

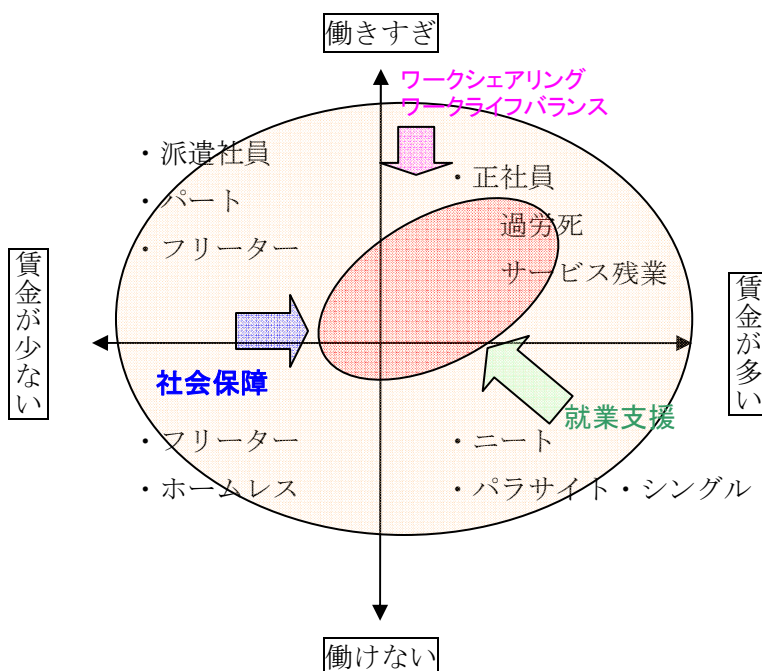
1. 勉強の動機

○ 新しい動機＝組織の運営

→営利 or 非営利

→運営…価値観の違う個々人の意見をどうやってまとめるか

○ 以前からの動機＝社会保障制度



2. 勉強の方法

(1) どんな方法をとったか

社会保障制度から探る

[想定 問題点→社会保障制度における政策→解決策]

なぜ社会保障を方法として選択したか

『営利を目的としない組織』の最たるものが地方自治体といえるでしょう¹

- a 行政による格差是正の弱者救済＝社会保障
- b 行政＝非営利
- c 社会保障と現実のギャップ
- d 今までの知識を利用

¹ 大山 (2008) 196 頁より引用。

- e 身近な例から
- f なぜNPOではないか…NPOは完全な非営利ではない
- g なぜ理念・思想からのアプローチではないか…身近ではない

(2) 内容—社会は変化しているけど、それに制度が追いついていない

(ア) 社会保障の見取り図

社会保障…85兆6469億円

○社会保険

医療保険…27兆1537億円 (31.7%)

年金…45兆5188億円 (53.1%)

介護保険

雇用保険

労災保険

○生活保護

○社会福祉

児童福祉

障害者福祉

児童手当

児童扶養手当

特別児童扶養手当

(イ) 社会保障制度の特徴

i) 規模—社会保障費が先進諸国に比べて低い

←なぜか？

①「会社」「核家族」→見えない(インフォーマルな)社会保障

②「公共事業」が実質的な社会保障として機能

→職を提供しその人の生活保障とする

ii) 内容—「年金」の比重が先進諸国中最も大きい

←なぜか？

高齢者が多いから

日本の高齢者人口：2643万人

高齢化率：20.7%

「失業」「子供」関連給付の比重が際立って低い

←なぜか？

「失業」…終身雇用制などの安定した会社

「子供」…強固で安定した家族

に頼っていた

iii) 財源－「社会保険」の枠組みの中に相当額の税が部分的に投入される

→保険と税の渾然一体性

←なぜか？

1941年 労働者年金保険法（労働者を対象→ドイツ型）

1961年 国民皆年金

1973年 “福祉元年”

1985年 基礎年金制度

(ウ) 社会保障制度の問題点－社会の変化と制度のギャップ

社会の変化

①「成長」が目標でなくなった

「経済成長の究極の源泉である『需要』そのものが、物質的な富の拡大の中で成熟ないし‘飽和’し、その結果、それまでのような『限りない成長』という目標自体が達成困難になり、さらにより根底的には、そうした『限りない成長』という目標に代わる目標を見出しえない、という状況に人々が置かれるようになった」²

「全体のパイが大きくならないなかで、増え続ける社会保障をはじめとする負担をどのようにまかなうのか」³

「現在のように物質的な豊かさが飽和し始め、経済が成熟期ないし安定期に入ってくると」⁴

「重要な変化は人々の経済成長への価値観の変化。もう日本は世界でもトップレベルの物質面での豊かな社会を手に入れた。」⁵

②ムラ社会的な原理→個人の孤立

「個々人がただ孤立し、バラバラになっているという、状況が顕著になっている。つまり、いわば『村社会』の‘単位’が『農村→カイシャ・核家族→個人』という形でどんどん縮小し、あたかも個人一人ひとりが閉じたムラ社会のようになり、新たな『つながりの原理』を見出せないでいる」⁶

「しかし、今や人々の働き方や生き方が根底から変化しつつある。」⁷

社会の変化による社会保障が補わなければいけない変化

→リスクが人生の前半期から中盤にも広く及ぶようになった

…今までのリスクは退職期＝高齢期に集中していた

² 広井（2006）4頁から引用。

³ 中垣（2005）20頁から引用。

⁴ 広井（1998）3頁から引用。

⁵ 椋野・田中（2007）268頁から引用。

⁶ 広井（2006）5頁から引用。

⁷ 椋野・田中（2007）269頁から引用。

それまでは終身雇用の会社
強固で安定した家族 → 見えない社会保障
限りない経済成長の時代 → 定常型社会 = 慢性的な供給過剰
→ 潜在的な失業リスク

(エ) 課題

「人生前半の社会保障」

1. 就学前教育を含めた保育ケア
ex) スウェーデンでの幼児教育
2. 成人時の経済的自立支援
ex) ・ イギリスでのチャイルドトラストファンド
・ 若者基礎年金
3. 各ライフステージとつながる制度

3. 結論

「非営利の組織をひとつにまとめて運営するには〇〇が必要である。」

・・・なぜ自分の納得する〇〇が見つからなかったか？

問題に対してまだ解決策が見つからなかった

もっと社会保障制度の理念的なところを探っていけばよかった

もっと社会保障制度の政策決定の場を探っていけばよかった

完全な非営利ではなかった・・・

4. 次へ

〇〇を得るための解決策

- ・ 社会保障の違ったアプローチを試みる
- ・ 行政への違ったアプローチを試みる
- ・ まったく違ったアプローチを試みる

『蟹工船』から得られること

「何時でも会社は漁夫を雇うのに細心の注意を払った。(中略) 労働組合などに関心のない、云いなりになる労働者を選ぶ。(中略) 然し、蟹工船の『仕事』は、今では丁度逆に、それ等の労働者を団結—組織させようとしていた。(中略) それは、皮肉にも、未組織の労働者、手のつけられない『飲んだくれ』労働者を

ワザワザ集めて、団結することを教えてくれているようなものだった。」⁸

『非営利組織の経営』から得られること

「使命の表現は、それに基づいて現実にも動けるものでなければならない。そうでなければ、単なるよき意図の表明に終わってしまう。使命の表現は、その機関が現実にも何をしようとしているのかに焦点を絞ったものでなければならず、そ

の組織にかかわる一人一人が、目標を達成するために自分が貢献すべきことはこれだ、といえるものでなければならない。」⁹

思想・哲学から垣間見えること

「つまるところ規範（正義）とは、『異なる主体に帰属する複数の価値ないし欲求をいかに調整するか』というところに発生するひとつの統制原理なのである（中略）複数の（利己的な）主体の間にひとつの『共通利害』（＝リスクへの集団的対応）を見出すということである。」¹⁰

5. おわりに

このような形式の勉強会を終えて

<参考文献>

広井良典 『持続可能な福祉社会』2006年、ちくま新書

広井良典 『日本の社会保障』1999年、岩波新書

中垣陽子 『社会保障を問い直す』2005年、ちくま新書

棕野美智子・田中耕太郎 『はじめての社会保障〔第5版〕』2007年、有斐閣アルマ

小林多喜二 『蟹工船』1953年、新潮社

P・F・ドラッガー 『非営利組織の経営』1991年、ダイヤモンド社

大山典宏 『生活保護 vs ワーキングプア』2008年、PHP新書

宮本太郎 「新しい社会的リスクと人生前半・中盤の社会保障」『NIRA 政策研究』2006年

⁸ 小林（1953）113頁から引用。

⁹ P・F・ドラッガー（1991）4頁から引用。

¹⁰ 広井（1999）129頁から引用。